

乳幼児のいる家庭における畳空間の使われ方と畳のニーズ

正岡さち*・平井優希**

Sachi MASAOKA, Yuki HIRAI

The Uses of Tatami Space and Needs of Tatami-mat in Families with Infants

要 旨

乳幼児のいる家庭における畳空間や畳の使用状況、畳の上での乳幼児の様子、保護者の畳に対する意識などを調査し、子育てにおける畳の意義、子育てにおいて求められる畳像を検討することを目的として研究を行った。

- ① 乳幼児のいる家庭の約9割の住宅に畳空間があり、8割以上の方が子育てにおいて畳が「必要である」と考えていた。
- ② 畳空間は「寝室」「多目的室」として多く使用されていた。生活行為別では、「休養の場」としての使われ方と、「体を動かす遊びの場」としての使われ方が見られた。畳の上での乳幼児の様子は、ゴロゴロしている等、姿勢に関する項目が最も多かった。畳の弾力性・保温性、等といった利点がこのような生活行為や乳幼児の行動に繋がったものと考えられる。
- ③ 子育てにおける畳の利点は「直に寝転ぶことができる」の割合が最も高く、ハイハイをしたり寝ころんだりすることが多い乳幼児をもつ保護者にとって大きな利点となっていると言える。欠点は衛生面であり、畳の良さを活かしながらいかに欠点を改善していくかが子育てにおける畳の使用の課題と言える。
- ④ 畳への評価や新しい畳の利用希望は高かった。畳の特性や新しい畳等、子育てをする保護者が情報を得られるような機会を設けることが求められる。

【キーワード：畳空間、和室、乳幼児、ニーズ、子育て期、住宅】

I. 緒言

和室及び床材としての畳¹⁾は、日本の伝統的な住文化である。しかし、近年、日本の住宅において和室が減少していることが様々なところで指摘されており、首都圏の調査や全国調査によって和室のない住宅が一定数存在することも報告されている²⁾³⁾。また、農林水産省の継続的な調査により、いぐさの生産量や畳表の国内供給量も減少している⁴⁾ことも明らかとなっており、和室や畳の減少を裏付ける結果であると言える。

畳を床材とした床に座る住様式の空間の長所として、空間の転用性が高く多様な住生活を保障する空間としての長所を持つことが古くから認識されており⁵⁾、切原ら⁶⁾は、和室は、床の間を備えた「座敷」とも呼ばれる接客を意識した空間から、現在は家族生活空間化しており、住まい手の個別性を発揮できる可能性を指摘している。また、和室の床材として使用される畳には、弾力性、保湿・断熱効果、吸湿・放湿効果、吸音効果等^{7)~12)}がある。近年では、森田らの研究¹²⁾にあるように、心理的效果・リラクセス効果があることも明らかになっている。

竹原ら¹³⁾は「日本のアイデンティティとして和室を

考える者は一定量いるが、精神論をふりかざすだけで今後の和室需要を下支えできるとはいいがたい」とし、「居住者が構成材の具体的な性能の良さに関する知識を持ち、正しい手入れの仕方を知ること、和室は実生活の場面で積極的に必要とされるのではないかと考える。」と結論づけている。

上記の点を考えると、和室や畳は、小さな子どもがいる家庭で活用できる可能性があるのではないかと考えられる。

子育て期の中でも、乳幼児期は人間形成の基礎を培う重要な時期である。そのため、生活の基盤である住まいの環境は重要であると言える。また、子育ての主体である保護者にとっても住まいの環境は心身に影響を与え、子育てにも影響してくる。

近年、住まいでの子どもの事故の増加や、保護者の育児・家事負担感の増大などに伴い、「子育て支援マンション認定制度」「キッズデザインの家」のように子どもや子育てをする保護者のことを考えた住まいづくりが始められるようになってきた。その中には、例えば、『大阪市子育て安心マンション認定制度』¹⁴⁾のように「転倒した際にけがをしないよう、弾力性に考慮した下地や、フローリング、クッションフロアなどの床材を使用し

* 島根大学学術研究院教育学系

** 元島根大学教育学部人間生活環境教育専攻

ている。」という、柔らかい床材を使用し、子どもの転倒への対応を定めているケースもある。この点から見ると、日本の伝統的床材である畳には弾力性があること²⁾から、子育てに適した床材であるという事が出来る。また、動き回ることの多い子どもの転倒のような事故対策だけでなく、いぐさの香りによるリラックス効果は、子どもにとって安心できる場となりえると考えられる。以上の点から、畳は子どもや子育てをする保護者に安心・安全な床材であると考えられる。しかし、一方で、畳には、ダニやカビが生じやすい等の短所があることも確かである。

そこで、本研究では、和室のデザインが従来の書院造を元にした伝統的なデザインから洋風のデザインまで多様化していることを考慮し、畳を床材として使用した空間を「畳空間」として、畳空間の使用について子育て期、特に、乳幼児のいる家庭を対象として、畳の使用状況や、畳の上での子どもの様子や保護者の畳に対する意識などを調査し、子育てにおける畳の意義や求められる畳像を検討することを目的として調査を行った。調査時期がやや古いが、和室や畳という空間・床材が子育てに及ぼす影響に関する研究が少ないことから、ここに報告する。

II. 調査概要

(1) 調査方法

調査対象は、島根県松江市内の幼稚園(2園)・保育所(2園)・幼保園(1園)に通う乳幼児の保護者、及び子育て支援センターを利用する乳幼児の保護者である。居住形態や保護者の就労形態、子どもの在宅時間等により違いが生じると考え、様々な施設、及び様々な地域にある園・センターを選定した。

調査票は各園・センターを通して配布・回収を行った。

調査内容は、乳幼児のいる家庭における畳の使用状況、畳の上での乳幼児の様子、保護者の畳に対する意識・ニーズ、畳の良い点・困っている点、新しい畳の使用希望等である。

調査期間は、平成23年11月～12月。

アンケートの配布部数は、699部(幼稚園183部、保育所295部、幼保園180部、子育て支援センター41部)、有効回収部数331部、回収率47.4%である。

(2) 用語の定義

今回の調査では、空間のデザインにかかわらず畳を床材として使用した空間を「畳空間」と表現する。

また、最初から床材として使われている畳を「敷き畳」、元々ある床の上において使われる畳で、動かすことができるものを「置き畳」と定義した。

さらに「敷き畳」は、襖などを閉めると独立した部屋になる「畳部屋」と、部屋としては独立していない「畳コーナー」に分類した。「畳部屋」と「畳コーナー」をあわせて「畳空間」と表現することとした。

III. 結果及び考察

1. 対象世帯と住居の概要

対象世帯の概要を表1に示す。

表1 対象世帯の概要

回答者	母	父						
	311(94.0)	20(6.0)						
家族構成	父・母・子 264(79.8)	父子 0(0)	母子 5(1.5)	父・母・子・祖父 38(11.5)	父・子・祖父 0(0)	母・子・祖父 6(1.8)	不明 18(5.4)	
家族人数	2人 2(0.6)	3人 67(20.2)	4人 123(37.2)	5人 83(25.0)	6人 22(6.6)	7人 4(1.2)	8人以上 1(0.3)	不明 49(14.8)
父年齢	20歳代 27(8.1)	30歳代 198(59.8)	40歳代 72(21.7)	50歳代以上 5(1.5)	不明 29(8.8)			
母年齢	20歳代 41(12.3)	30歳代 231(69.8)	40歳代 53(15.9)	50歳代以上 0(0)	不明 6(1.8)			
父職業	会社員 196(59.2)	公務員 75(22.7)	団体職員 8(2.4)	農林漁業 0(0)	自営業 20(6.0)	自由業 1(0.3)	パート 0(0)	専業主婦 0(0)
	内職 0(0)	無職 1(0.3)	その他 3(0.9)	不明 27(8.2)				
母職業	会社員 51(15.4)	公務員 28(7.9)	団体職員 8(2.4)	農林漁業 0(0)	自営業 11(3.3)	自由業 0(0)	パート 63(19.0)	専業主婦 153(46.2)
	内職 0(0)	無職 5(1.5)	その他 9(2.7)	不明 5(1.5)				
子ども人数	1人 78(23.6)	2人 138(41.7)	3人 57(17.2)	4人以上 9(2.7)	不明 49(14.8)			
長子年齢	0歳 24(7.3)	1歳 13(3.9)	2歳 17(5.1)	3歳 19(5.7)	4歳 22(6.6)	5歳 34(10.3)	6歳 45(13.6)	7歳以上 124(37.5)
	不明 33(10.0)							
次子年齢	0歳 41(12.4)	1歳 50(15.1)	2歳 65(19.6)	3歳 45(13.6)	4歳 34(10.3)	5歳 32(9.7)	6歳以上 18(5.4)	不明 46(13.9)
乳幼児人数	1人 166(50.2)	2人 108(32.0)	3人以上 13(3.9)	不明 46(13.9)				
乳幼児 平日昼間の状況	保育園 137(41.4)	幼稚園 94(28.4)	自宅 84(25.4)	不明 16(4.8)				

回答者は母が94.0%、父が6.0%と母が約9割であった。

また、乳幼児の平日昼間の在宅時間の長さによる影響を見るため、乳幼児の平日昼間の状況を保育所・幼稚園・自宅の3タイプに分類した。乳幼児が複数いる場合は、最も在宅時間が長い乳幼児に合わせて分類した。例えば、幼稚園に通っている乳幼児と自宅にいる乳幼児がいる家庭は「自宅」に分類する、という形である。

対象住戸の概要を表2に示す。

建て方は集合住宅が56.5%、一戸建てが43.2%で集合住宅が若干多くなっている。

表2 対象住戸の概要

建て方	一戸建て	集合住宅	不明			
	143(43.2)	187(56.5)	1(0.3)			
築年数	10年未満 137(41.4)	10～20年 78(23.6)	20～30年 35(10.6)	30～40年 29(8.8)	40～50年 11(3.3)	50～60年 4(1.2)
	60～70年 0(0)	70年以上 1(0.3)	不明 36(10.9)			
所有形態	持ち家 165(49.8)	借家 163(49.2)	不明 3(0.9)			
LDK以外の部屋数	1部屋 13(3.9)	2部屋 80(24.2)	3部屋 111(33.5)	4部屋 64(19.3)	5部屋 34(10.3)	6部屋 12(3.6)
	7部屋 5(1.5)	8部屋 3(0.9)	9部屋 1(0.3)	10部屋以上 1(0.3)	不明 7(2.1)	

2. 畳空間の設置状況と用途

まず、畳の設置状況を図1に示す。約9割の住宅に、何らかの形で畳があった。逆に言うと、約1割の家庭に

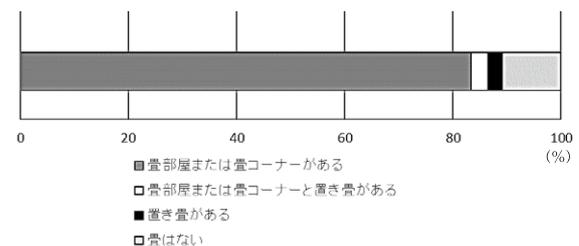


図1 畳の有無と種類

畳がないとも言える。この結果から、畳を床材とした空間がない住宅は、既往の研究で指摘されているような首都圏のような大都市の住宅²⁾³⁾だけでなく、地方都市においても存在していると言える。

内訳を見ると、「畳空間」がある住宅が86.4%で、そのうち「畳コーナー」は極めて少なく、ほとんどが「畳部屋」であった。

なお、「置き畳のみ」は少数であったことから、本報では「畳空間」について分析を行う。

住宅における畳空間の用途について、図2に示す。

畳空間の用途は寝室が最も多く、続いて多目的室であった。また、子育てに使用するかどうかも尋ねたところ、若干割合が少なくなるものの、子育てに関係のない用途と同様の傾向が見られた。篠田¹⁵⁾は、乳幼児がいる家庭では、9割の家庭が1つの空間で添い寝をしていると述べており、それが表れた結果であると考えられる。

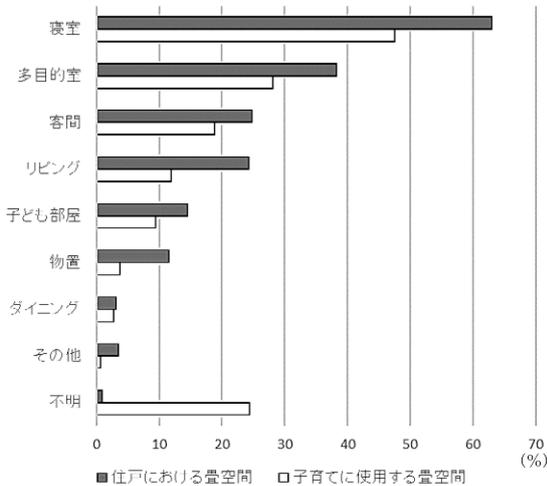


図2 畳空間の用途と子育てにおける用途

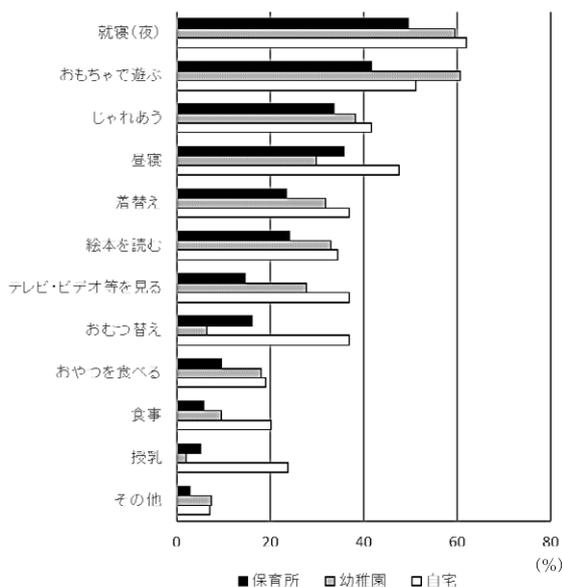


図3 乳幼児の平日昼間の状況別に見た畳空間で行われる子育てに関連した生活行為

3. 畳空間で行われる子育てに関連した生活行為

畳空間で行われる子育てに関連した生活行為について尋ねたところ、主に「就寝」「昼寝」の休養の場としての使われ方と、「おもちゃで遊ぶ」「じゃれ合う」の体を動かす遊びの場としての使われ方の2つが上位を占めた。「おむつ替え」や「食事」等はあまり行われていなかった。

これを、乳幼児の平日昼間の状況別に見たものを図3に示す。

ほとんどの生活行為において、「自宅」の場合に行われている割合が高かった。これは、乳幼児の在宅時間が長いことから当然の結果と考えられる。特に、「おむつ替え」は「自宅」の場合4割近い家庭で行われており、「保育所」・「幼稚園」との差が大きかった。「おもちゃで遊ぶ」、「昼寝」等の割合が高かったことを合わせて考えると、他の床材に比べて柔らかい、冷たさを感じにくい、等の床材としての畳の特徴が影響しているのではないかと推測される。また、「おもちゃで遊ぶ」「じゃれ合う」「昼寝」「着替え」等、様々な用途に使用されているのは、室の用途として、「多目的室」という位置づけの使用方法が2位であったことから、子どもや子育てに関連した生活行為が行われることにつながっているのではないかと考えられる。

4. 畳の上での子どもの様子の違い

畳の上と住宅内の他の場所で、子どもの様子に違いが見られるかどうかを尋ねた結果を図4に示す。

「違いあり」は約3割であった。

これを、母親の年齢別に見た結果を図4に示す。母親の年齢が高いほど「違いあり」が多くなっている。経験を積むことにより、乳幼児の様子の違いに気づきやすくなるからではないかと考えられる。このことから、畳の上での乳幼児の様子に違いがあるが、保護者自身が気づいていないケースもあるのではないかと推測される。

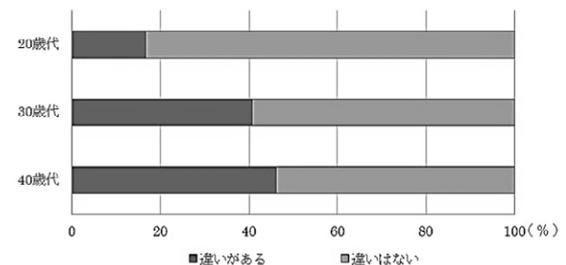


図4 母親の年齢別に見た畳の上での乳幼児の様子の違いの有無

そこで、この結果を、保育所・幼稚園の調査⁸⁾と比較したところ、保育所・幼稚園では「違いあり」が約8割であったことから、日常的に子どもを見ているため、家庭では乳幼児の様子の違いが認識しにくい部分があるからではないかと考えられる。

次に、畳の上での乳幼児の様子を具体的に自由記述で記入してもらった。その結果、「畳の上でだけごろごろする」「畳の上でだけ正座する」「のんびりしている様

子「じゃれ合う」「裸足で走る」「おもちゃを広げる」「ハイハイしやすそう」等、様々な記述が得られた。

それらを、類似点から分類したところ、図5に示すように「姿勢に関すること」「遊びに関すること」「気持ちに関すること」「その他」の4つの項目に分類できた。

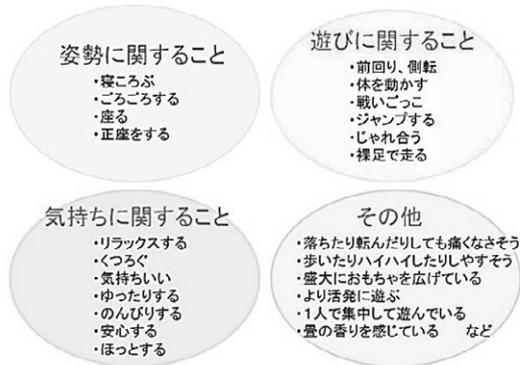


図5 畳の上での乳幼児の様子分類

4つの項目について記述した人の割合を集計した結果を図6に示す。

最も多かったのが「姿勢に関すること」で次いで「遊びに関すること」であった。具体的には、「寝ころぶ」「ごろごろする」といった記述が多かったことから、畳の特徴である柔らかい、冷たさを感じにくい、等により、乳幼児がこういった姿勢を他の床材よりも取りやすいのではないかと考えられる。また、「畳の上でだけ正座をする」という記述もあり、畳ならではの姿勢ではないかと言え、畳を床材として使用することによって、日本の生活文化が自然と伝わっていく一例ではないかと考えられる。

「気持ちに関すること」ではいずれも居心地の良さを表すものであるが、「姿勢に関すること」とは異なり、乳幼児の具体的な様子というよりは保護者が見て乳幼児がそのように感じているように見えるという項目であり、抽象的ではあるが、畳自体のリラックス効果が表れた項目であると言えよう。

「遊びに関すること」ではいずれも体を自由に動かして遊ぶものとなった。畳空間の用途として、「寝室」「多目的室」が多かったことから、畳空間内には家具が少ないと推測され、そのため、他の空間より身体を動かしやすいのではないかと考えられる。また、畳が柔らかいため、転倒しても痛くない、裸足で走っても足の裏が痛くない等の理由から、乳幼児自身も身体を動かしやすいことが考えられる。

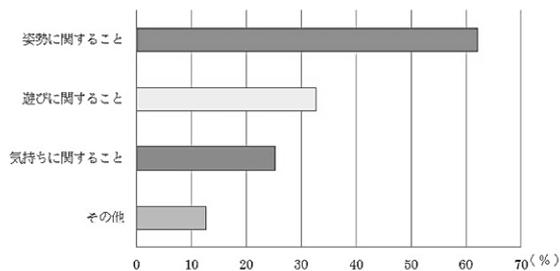


図6 畳の上での乳幼児の様子

5. 畳の上で乳幼児に感じて欲しい点

畳の上で乳幼児に感じて欲しい点を尋ねたところ、「やすらぎ」「温かみ」といった居心地の良さが上位を占めた。次いで「和の感性」や「畳の素材感」があげられた。「和の感性」と類似した項目である「伝統・文化」は「和の感性」より少なかった。

これを、乳幼児の平日昼間の状況別に比較をした結果を図7に示す。

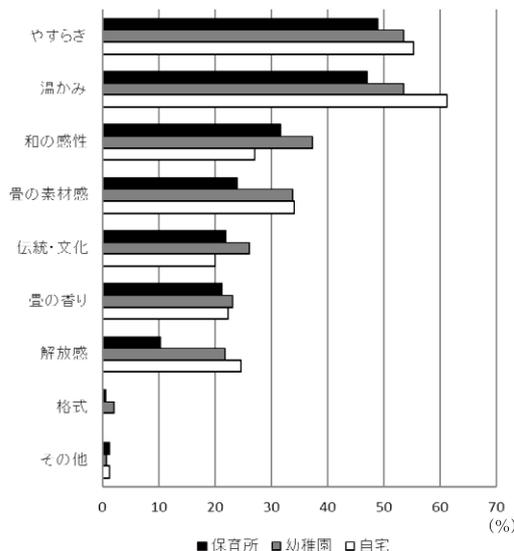


図7 乳幼児の平日昼間の状況別に見た畳の上で乳幼児に感じて欲しい点

「やすらぎ」「温かみ」「解放感」は、自宅・幼稚園・保育所の順に割合が多く、乳幼児が住宅内で長時間過ごす場合ほど、リラックス感を感じて欲しいと考えていると言える。しかし、これらの項目は畳でなくても感じることが可能である漠然としたものである。畳の上での乳幼児の様子でも、この漠然とした「気持ちに関すること」をあげた人が3割近く存在しており、何故こういった感覚を畳の上で感じて欲しいのか、何故感じられると考えるのかを、今後検討していく必要がある。

「和の感性」「伝統・文化」は、若干ではあるが幼稚園において最も多かった。これは、幼稚園が教育機関であることから、教育的視点を持っている保護者がいるためではないかと考えられる。また、「伝統・文化」と「和の

感性」については、昼間、幼稚園・保育所で過ごしている子どもの保護者で差があり、この2項目は類似しているものの、異なるものとして捉えられているのではないかと推測される。

6. 子育てにおける畳の必要性

子育てにおける畳の必要性を尋ねたところ、8割以上の保護者が子育てに畳は必要であると答えた。

これを、自宅の畳空間の有無別に見た結果を図8に示す。「畳あり」の方が必要性を感じている割合が高かった。これは、自宅に畳があることによってその有効性が感じられた結果だと考えられる。その他、畳の上での乳幼児の様子の違いの有無別でも差が認められ、違いがあると感じている保護者は全員が「必要」と感じており、畳の上での乳幼児の様子の違いは「良い違い」である、ひいては乳幼児に良い影響があると受け止められているものと推測される。

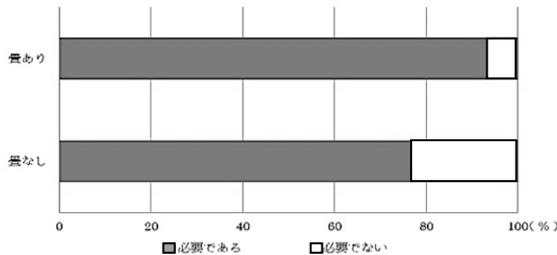


図8 畳空間の有無別に見た
子育てにおける畳の必要性

7. 子育てにおける畳の利点

子育てにおける畳の利点について尋ねた。「直に寝転ぶことができる」が最も多く、「温かみがある」「リラックスできる」と続いた。畳は、フローリングのように固く、冷たくないため、ハイハイをしたり寝転んだりすることが多い乳幼児をもつ保護者にとって、特に大きな利点となっていると考えられる。また、「温かみがある」「リラックスできる」などくつろぐことができる点や、「ケガをしにくい」といった安全面においても評価されていた。

これを、子育てにおける畳の必要性別にみた結果を図9に示す。

どの項目も、「必要」と感じている人で評価されていたが、「必要」と感じている人は、特に、「直に寝転ぶことができる」という点と、リラックス・温かみ・感触という特徴を評価していた。

一方、差が小さかったのは、「ケガをしにくい」「音が響きにくい」「伝統・文化に触れる機会になる」で、弾力性・吸音性といった畳の物理的特徴と、古くからある日本の伝統的文化に関する評価は、子育てへの畳の必要性とは関係が小さいと考えられる。逆に言うと、これらの畳の特徴は、子育てや畳の必要性等に関係なく、畳の特徴として評価されている項目であると言えよう。

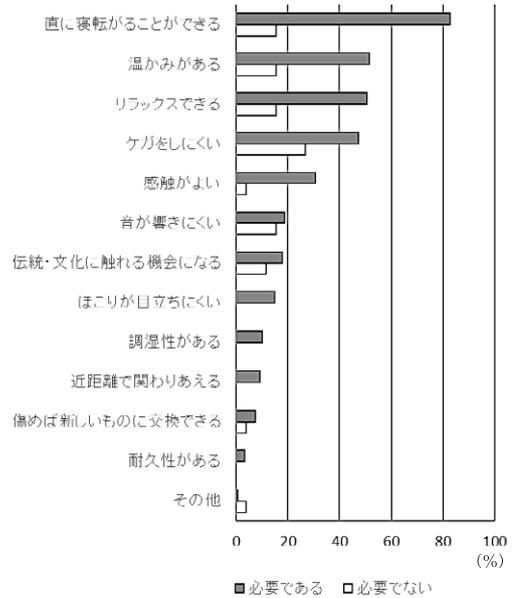


図9 子育てにおける畳の必要性別に見た
子育てにおける畳の利点

8. 子育てにおける畳の欠点

次に、畳の欠点について尋ねたところ、「擦れてクズが出る」「水をこぼすとしめる」「ダニが発生しやすい」が上位を占めた。

これを、子育てにおける畳の必要性別にみた結果を図10に示す。

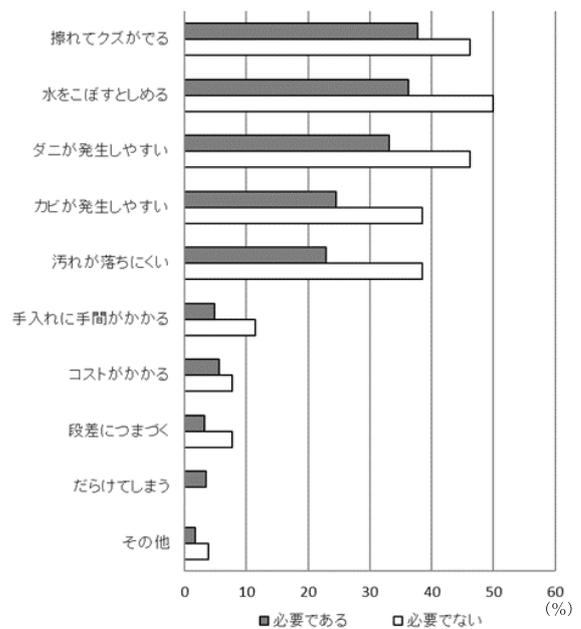


図10 子育てにおける畳の必要性別に見た
子育てにおける畳の欠点

どの項目も、「必要でない」と感じている人があげている割合が高くなっていった。しかし、差はあるものの、「擦れてクズが出る」「水をこぼすとしめる」「ダニが発生しやすい」「カビが発生しやすい」「汚れが落ちにくい」は「必要」と考えている人でも欠点としてあげている割合が高く、また、利点と比較すると、畳の必要性による差が小さく、これらが畳の主要な欠点として捉えられていると言える。

近年、アレルギーをもつ子どもが増えている現状を考えるとダニやカビへの対応は必要なことであり、子どもの活動によって畳が汚れたりクズが出るが多いことを考えると、これらの欠点は、今後、解決していかなければならない課題であると言えよう。

9. 新しい機能を持つ畳の利用希望

畳は、畳床が稲藁、畳表はいぐさで作られるのが従来の形であった。しかし、近年では、畳床が稲藁で作られることはほとんどなくなり、インシュレーションボードが使用される物が大半を占めるようになった。近年、畳表も、いぐさ以外の材料が開発され、使用され始めている。さらには、従来の畳にはない機能を付加された畳表も開発されている。そこで、伝統的な畳とは異なる特徴をもつ畳を7種類あげ、その利用希望を尋ねた。選択肢は、平成22年に行った幼稚園・保育園の調査¹⁶⁾の選択肢と同じものを使用し、それに、「従来の伝統的な畳」「畳は使いたくない」の選択肢を加えた中から、複数回答で選んでもらった。

その結果、雑菌を分解する「光触媒畳」の利用希望が最も高くなった。次いで断熱効果・吸音効果のある「炭化コルク使用畳」、カビが発生しにくい「和紙・デザイン畳」であった。また、従来の「伝統的な畳」を選択している人も1割程度おり、欠点はあるとしても、畳は伝統的な形であるべきと考えている層が存在すると考えられる。

これを、子育てにおける畳の必要性別に見た結果を図11に示す。

畳を「必要」と考えている人は、「光触媒畳」「炭化コルク使用畳」「和紙・デザイン畳」の割合が高く、雑菌・防カビ・防音という点への対応を評価したものではないかと考えられる。

一方、「必要でない」と考えている人に多かったのが「ウォッシュャブル畳」「いぐさ・カラー畳」であった。

ウォッシュャブル畳は洗って汚れを落とすという汚れに強い点が特徴のものであるが、類似の機能を持った「光触媒畳」や防カビ機能を持つ「和紙・デザイン畳」と同程度以上の人が選択していることから、不要派は、自らの手で汚れを落とすことが可能で、汚れが目に見えて落ちるといった実感が得られる点を重視しているのではないかと考えられる。また、洗えるということは水分に強いことが連想されることから、欠点の2位としてあげられていた「水分を落とすとしめる」という欠点を補うことを評価しているとも考えられ、単なる汚れだ

けでなく水分を落とすことを嫌う人が多く、希望が多くなったのではないかと考えられる。

また、「いぐさ・カラー畳」の希望が多かったのは不要派であった。畳の利点について伝統・文化・素材感といった点では不要派と必要派で評価に差がなかったことから、いぐさという伝統的素材を評価した上で、色が選べるというデザイン性も評価した結果ではないかと考えられる。

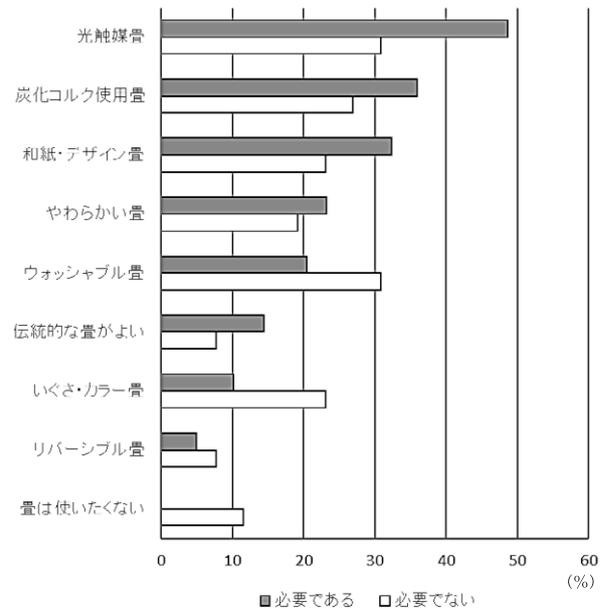


図11 子育てにおける畳の必要性別に見た新しい畳の利用希望

差があまり認められなかったのは「やわらかい畳」で、畳の柔らかさへの評価は、子育てへの畳の必要性とは関係がないものと考えられる。元々、畳には弾力性があることから、今ある以上の柔らかさは必要ないと考えているとも推測できる。

また、畳は「必要でない」と考えている人に「畳は使いたくない」と答えた人がいることから、畳不要派の中には、欠点をどのように補っても畳は使いたくないという層が存在しているものと考えられる。

自由記述欄には、「こんなにたくさんの種類の畳があることを初めて知った。」「値段が手ごろであればすぐにでも使ってみたい。」等の意見も見られた。畳の特性や新しい畳等、子育てをする保護者が情報を得られるような機会を設けることが求められると言えよう。

10. まとめ

「自宅」の場合に畳空間では様々な生活行為が行われている割合が高かった。

詳細に見ると、「おむつ替え」は「自宅」の場合4割近い家庭で行われており、「おもちゃで遊ぶ」、「昼寝」等の割合が高かったこと、乳幼児は畳の上で「寝ころぶ」「ごろごろする」という姿勢が見られること、体を動かす遊び

をする、等から、畳の特徴である柔らかいという弾力性、冷たさを感じにくいという保温性、等といった利点がこのような生活行為や乳幼児の行動に繋がったものと考えられる。

また、子育てにおける畳の利点として最も評価されていたのは直に寝転がることのできる点で、ハイハイをしたり床に座ったり床を使ったりして遊ぶ遊びがある乳幼児にとっては大きな利点であり、この利点は、畳の弾力性・保温性によってより評価される点ではないかと考えられる。さらには、居心地の良さ・リラックスできるといった点も評価されており、非常に抽象的な概念ではあるが、畳に対する1つの評価として定着している点ではないかと考えられる。

畳に感じて欲しい点として、「安らぎ」「温かみ」があげられた。しかし、これらの項目は畳でなくても感じる事が可能である漠然としたものである。畳の上での乳幼児の様子でも、この漠然とした「気持ちに関すること」をあげた人が3割近く存在していた。「和の感性」が上位にあがっていたことを考えると、この漠然とした感覚的な部分は、こういった感性の部分と関係があるのではないかと考えられるが、推測の域を出ない。何故こういった感覚を畳の上で感じて欲しいのか、何故感じられると考えるのかを、今後検討していく必要がある。和の感性「伝統・文化」といった点はその次に位置づけられていた。しかし、年々住宅における畳空間が減少していく現状がある一方で、平成26年に国土交通省が和の住まいや住文化の良さの再認識、伝統技能の継承と育成等を図るため「和の住まいの推進」¹⁷⁾を行い国民向け普及活動を推進する方針を出したり、新学習指導要領に伝統や文化に関する教育の充実¹⁸⁾が盛り込まれる等の状況を見ると、今後は、この視点が強くなっていくのではないかと推測される。

畳の欠点として「衛生面」があげられた。子育てにおいて畳は必要と考える人が多かった一方で、近年、アレルギーをもつ子どもが増えている現状を考えるとダニやカビへの対応は必要なことであり、子どもの活動によって畳が汚れたりクズが出ることが多いことを考えると、これらの欠点は、今後、解決していかねばならない点であると考えられる。畳の良さを活かしながらいかにこれらの欠点を改善していくかが子育てにおける畳の使用の課題と言える。

畳への評価や新しい畳の利用希望は高かった。また、欠点と重ね合わせると、「水をこぼすとしめる」ことが最も嫌われていると考えられる。畳の特性や新しい畳等、子育てをする保護者が情報を得られるような機会を設けることが求められる。一方、少数ではあるが、畳は伝統的な形であるべきという層と、いかに改善されても畳は使いたくないという層が存在していたことは、配慮すべき点であると考えられる。

IV. 要約

乳幼児のいる家庭における畳の使用状況、畳の上での乳幼児の様子、保護者の畳に対する意識などを調査し、子育てにおける畳の意義、子育てにおいて求められる畳像を検討することを目的として研究を行った。結果を要約すると以下ようになる。

- (1) 乳幼児のいる家庭において約9割の住宅に畳があり、8割以上の人が、子育てにおいて畳が「必要である」と考えていた。
- (2) 畳空間は「寝室」「多目的室」として多く使用されており、子育てにおける使用の割合も高かった。生活行為別では、「休養の場」としての使われ方と、「体を動かす遊びの場」としての使われ方が見られた。畳の上での乳幼児の様子は「姿勢に関すること」「気持ちに関すること」「遊びに関すること」「その他」の4つに分類することができ、姿勢に関する項目が最も多かった。畳のもつ弾力性・保温性等といった利点がこのような生活行為や乳幼児の行動に繋がったものと考えられる。
- (3) 子育てにおける畳の利点は「直に寝転ぶことができる」の割合が最も高く、ハイハイをしたり寝ころんだりすることが多い乳幼児をもつ保護者にとって大きな利点となっていると言える。欠点は衛生面であった。特に、畳の良さを活かしながらいかに欠点を改善していくかが子育てにおける畳の使用の課題と言える。
- (4) 畳への評価や新しい畳の利用希望は高かった。欠点と重ね合わせると、「水をこぼすとしめる」ことが最も嫌われていると考えられる。畳の特性や新しい畳等、子育てをする保護者が情報を得られるような機会を設けることが求められる。

引用文献

- 1) 平井ゆか、内田祥哉: 畳と畳を支えるシステムの開発と普及についての文献に関する研究、住総研研究年報No. 27(研究No. 9919)、pp. 1~12(2000)
- 2) 川村道乃、今井範子、伊東理恵: 住宅平面における畳空間の動向: 首都圏の注文戸建住宅における、日本家政学会誌Vol. 57、No. 1、pp. 39~52(2006)
- 3) 白井宏生、鈴木義弘、湯浅裕樹、岡俊江、切原舞子: 居室面積からみた和室への要求構造の分析~現代住宅における平面構成の変容に関する研究第8報、日本建築学会九州支部研究報告第51号、pp. 257~260(2012)
- 4) 農林水産省: いぐさ(畳表)をめぐる事情(2020) <https://www.maff.go.jp/j/seisan/tokusan/regional/attach/pdf/index-1.pdf#search=%E3%81%84%E3%81%90%E3%81%95+%E7%94%9F%E7%94%A3%E9%87%8F>(2020年9月30日参照)
- 5) 大学住居学研究会編: 資料住居学、建帛社(1985)
- 6) 切原舞子、鈴木義弘、岡俊江: 現代独立住宅におけ

- る座敷の使われ方と存在意義について～現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究 その2～、日本建築学会計画系論文集、第74巻、第643号、pp.1951～1960(2009)
- 7) 森田洋:イグサのすべて、新芽出版(2008)
 - 8) 早水輝好、柳沢幸雄、西村肇:室内材のNO₂収着特性と生物学的除去の可能性の検討、大気汚染学会誌、18(1)、pp.18-23 (1983)
 - 9) 森田洋、塩澤正三、大森智子、志水由紀、稲田剛夫:イグサの抗菌性と腐敗試験、防菌防黴、30、p p. 785-790(2002)
 - 10) 森田洋:イグサ、地域特産物の生理機能・活用便覧、株式会社サイエンスフォーラム、pp.470-473(2004)
 - 11) 森田洋、馬見塚香織、志水由紀:イグサによるレジオネラ菌の生育阻止効果、防菌防黴、33、pp.383-389(2005)
 - 12) 森田洋、福田翼、堤一代、馬見塚香織:畳を用いた学習環境が児童・生徒の学習面と情意面に及ぼす影響、日本家政学会誌Vol. 60、No. 4、pp.323～330 (2009)
 - 13) 竹原宏美、佐々尚美、梁瀬度子:居住者の和室に対する思い入れ及び要求と今後の和室の展望について、日本家政学会誌Vol. 68、No. 12、pp. 674～686 (2017)
 - 14) 大阪市子育て安心マンション認定制度:大阪市 <http://www.city.osaka.lg.jp/toshiseibi/cmsfiles/contents/0000152/152967/20131105kijyun22-31.pdf> (2020年9月30日参照)
 - 15) 篠田有子:子どもの将来は「寝室」で決まる、光文社新書(2009)
 - 16) 正岡さち、井上直美、亀崎美苗、田中宏子:幼稚園・保育所における畳の使用実態、鳥根大学教育学部紀要、第50巻、pp.131-139(2016)
 - 17) 和の住まいの推進:国土交通省 http://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku_house_tk4_000078.html (2020年9月30日参照)
 - 18) 幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント:文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/06/16/1384662_2.pdf (2020年9月30日参照)